

宮沢賢治童話における「まるで」の用法

山口 豊

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第6号 2021年

宮沢賢治童話における「まるで」の用法

山口 豊

1 研究の動機、研究の目的、研究の方法

宮沢賢治作品を読んでいると、「まるで」という語によく出会う。たとえば、「セロ弾きのゴーシュ」には次のような表現が出てくる。

- ・だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。
- ・表情ということがまるでできてない。
- ・それから頭を一つふって椅子へかけるとまるで虎みたいな勢でひるの譜を弾きはじめました。
- ・顔もまっ赤になり眼もまるで血走ってとても物凄い顔つきになりいまにも倒れるかと思うように見えました。
- ・それからまるで嵐のような勢で「印度の虎狩」という譜を弾きはじめました。
- ・しまいは猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐるゴーシュをまわりました。
- ・するとかっこうはまたまるで本気になって「かっこうかっこうかっこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。
- ・それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて
- ・そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしごむのくらいしかないのでゴーシュはおもわずわらいました。
- ・こどものねずみはまるで蚊のような小さな声でセロの底で返事しました。
- ・野ねずみはもうまるでばかのようになって泣いたり笑ったりおじぎをしたりして
- ・それからあの猫の来たときのようにまるで怒った象のような勢で虎狩りを弾きました。
- ・十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。

しかし、すべてが同じ用法として「まるで」という語が用いられているのではない。なぜなら、「まるで」という語は「比喩」としての用法と「強調」としての用法を持つからである。

宮沢賢治はこれら2つの「まるで」という表現をうまく織り交ぜて用いている。

現代においてもこの2つの用法は存在しており、使用されている。

ただ、私個人としては「比喩」の用法として使用することが多く、「強調」としての用法は理解語彙でしかない。

そのためか宮沢賢治が多用する「まるで」に違和感を覚えてしまうのである。

一方、近年の人気漫画『銀魂』（空知英秋）に登場する人物「長谷川泰三」を、「まるでダメなおっさん」の頭字語として「まだお」と評したり、そこからそういう人物を「まだお」と呼んだりすることが若者を中心に認知されているということである。ここでは「強調」としての用法が用いられている。

そこで、宮沢賢治の用いた「まるで」という表現に注目し、どのような分類ができるのか、そして他の「比喩」や「強調」を表す語が多くある中で、なぜそれを選んで用いたのかということについて分析することを目的とした。

そのためにはまず、宮沢賢治が童話に用いた「まるで」について先行研究を確認するとともに辞書の記述順序を調査することとする。

次に宮沢賢治が童話に用いた「まるで」という語をリストアップし、それらを用法や形態によっ

て分類する。さらには「まるで」という語全体における分類ごとの比率を調査し、宮沢賢治が「比喩」「強調」のいずれのパターンをよく用いていたかという傾向を探っていく。

また、出現した語とその用法が作品によって偏りがないかということも調べていく。

そして比喩の用例のみについて、名詞による形状イメージでの比喩か、動詞による動作イメージによる比喩かを調べ、宮沢賢治の比喩の特色も探っていくこととする。

そして最後に、類語との比較を行い、宮沢賢治がどうして「まるで」という表現を選択したのかということについて考察することとする。

2 先行研究、辞書の記述

「まるで」という語がどのような状況で用いられるのか、また他の意味の似通った類義語との使い分けについては、李津安「副詞「いかにも」「さも」「まるで」「まさに」について」^①、朴秀娟「完全否定を表す副詞「まるで」「ぜんぜん」「まったく」に関する一考察」^②、朴秀娟「副詞「まるで」が共起する述語についての一考察 -非比況の用法を中心に-」^③などの論文で「まるで」という言葉を取り上げている。しかし、「まるで」のみの用法について書かれた論文は少なく、しかも宮沢賢治の「まるで」という語の先行研究としては、小松聡子「賢治童話の表現研究 -副詞「まるで」を手掛かりとして-」という論文^④があげられる。この論文において小松は、生前発表童話における「まるで」の用例(91 例)を中心に、意味用法の分類を行い、それぞれの表現について分析・考察することで宮沢賢治の表現の特徴に迫ろうとしている。

小松の分類は以下の通りである。

一 下に否定がくる陳述副詞的用例

- ① 下に否定を表す語がくる用例
- ② 下に否定的なニュアンスを表す語がくる用例

二 比況を表す陳述副詞的用例

- ① 下に「ようだ」「みたいだ」等の比況を表す助動詞がくる用例
- ② 下に「くらゐ」「ぐらゐ」がくる用例
- ③ 下に①②で挙げた語がこない用例

三 程度副詞的用例

- ① 程度がはなはだしいことを表す用例
- ② 完全にその状態であることを表す用例
- ③ 残すところなくすべてにわたるさまを表す用例

なお、この論文で小松は「方言」としての「まるで」の用法について触れている。

では、辞書では「比喩」と「強調」の用法がどちらを第一義として記載しているのでしょうか。現在市販されている辞書では以下のように記されている。

岩波書店 『広辞苑(第7版)』

まる - で【丸で】〔副〕 ①ちょうど。あたかも。さながら。「一夢のような話」

(ア) (下に否定的な語を伴って) 全く。全然。まるっきり。「一駄目だ」

三省堂 『大辞林(第4版)』

まる で【丸で】〔副〕 ①下に否定的な意味の語を伴って否定の意を強める。まるきり。全然。「漢字が一読めない」「一違う」

②どのような点から見てもほとんど同じであるさま。ちょうど。さながら。

「一嵐のようだ」「一子供だ」→まる（丸）

大修館 『明鏡』

- まる - で【丸で】〔副〕 ①《多く下に「ようだ」「みたいだ」などの比喩表現を伴って》ほとんど同じようであるさま。あたかも。さながら。「一夢のようだ」「一死んだみたいに黙り込む」「あのはしゃぎようは一子供だ」
- ②《下に否定的表現を伴って》まるっきり。全然。「予想とは一違う」

学研 『改訂 現代新国語辞典』

- まる - で《副》 ①すっかり。まるっきり。「見本と一ちがう」類語 まったく。全然。
- ②さながら。あたかも。ちょうど。「一綿のような雪だ」
- 参考①は下に打ち消しや否定の語を、②は下に「ような」の意を表す語を伴う。

集英社 『国語辞典（第3版）』

- まる で【丸で】〔副〕 ①（多く、下に「ようだ」「みたいだ」などの語を伴って）きわめて類似しているさま。あたかも。さながら。「一仏のような人」「一子供みたいだ」
- ②（下に否定的な意味の語や打消の語を伴って）ほとんどその状態であるさま。全然。「一だめだ」「一違う」「一話にならない」

旺文社 『改訂新版 国語辞典』

- まる - で【丸で】〔副〕 ①まったく。完全に。「一話にならない」
- ②よく似ていることを表す。さながら。「一天国のようだ」

新潮社 『改訂 新潮国語辞典』

- まる で〔副〕 ①全く。「一違う」
- ②あたかも。「一子供だ」

小学館 『精選版 日本国語大辞典』

- まる - で【丸一】〔副〕 ①まさしくその状態に相当したり、類似したりするさまを表す語。ちょうど。さながら。あたかも。
- ②完全にその状態であることを強めていう語。まったく。

このように辞書にも「比喩」と「強調」という2つの用法が示されているが、どちらを第一義にしているかということについては以下の表ようになる。

比喩を第一義に記載	岩波書店	大修館	集英社	小学館	
強調を第一義に記載	三省堂	学研	旺文社	新潮社	

このように辞書ごとに取り上げる順番はまちまちであり、どちらかが絶対的な第一義というものではないことがわかる。

では、どちらの用法の使用頻度が高いのであろうか。そこで、以下に宮沢賢治が童話作品の中に用いた「まるで」の用例を抜き出してみることにした。

3 賢治作品の中の使用例と分類

先に小松が19作品の童話について調査を行っているが、本稿では調査範囲を広げ、86作品の童話について「まるで」という語の使用例数の調査を行った。調査対象と用例数は以下の通りである。

なお、底本には『文庫版 宮沢賢治全集』筑摩書房を用いた。

作品名	用例数	作品名	用例数	作品名	用例数
イーハトーボ農学校の春	5	三人兄弟の医者と北守將軍	7	土神ときつね	13
いちょうの実	4	鹿踊りの始まり	1	手紙四	2
インドラの網	2	シグナルとシグナレス	12	電車	1
馬の頭巾	2	水仙月の四月	5	毒蛾	7
おきなぐさ	7	税務署長の冒険	13	とっこべとら子	2
オツベルと象	1	セロ弾きのゴーシュ	14	どんぐりと山猫	6
カイロ団長	1	台川	1	なめとこ山の熊	16
かしはばやしの夜	8	谷	4	二十六夜	4
ガドルフの百合	6	種山ヶ原	1	猫の事務所	3
グスコープドリの伝記	20	タネリはたしかにいちにち囃んでいたやうだった	5	林の底	1
クンねずみ	2	注文の多い料理店	1	ひかりの素足	23
さいかち淵	7	チュウリップの幻術	1	ビジテリアン大祭	14
サガレンと八月	6	月夜のけだもの	3	ひのきとひなげし	6
さるのこしかけ	1	月夜のでんしんばしら	9	フランドン農学校の豚	8
ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記	15	貝の火	12	蜘蛛となめくじと狸	4
ポラーノの広場	17	蛙のゴム靴	3	鳥をとるやなぎ	5
マグノリアの木	2	革トランク	1	鳥箱先生とフウねずみ	1
まなづるとダアリヤ	2	学者アラムハラドの見た着物	5	洞熊学校を卒業した三人	3
マリヴロンと少女	2	雁の童子	3	檜ノ木大学士の野宿	17
みじかい木ぺん	4	気のいい火山弾	1	二人の役人	7
めくらぶどうと虹	3	銀河鉄道の夜	40	氷と後光	3
やまなし	2	耕耘部の時計	2	氷河鼠の毛皮	6
よく利く薬とえらい薬	1	山男の四月	1	葡萄水	2
よだかの星	11	四又の百合	3	風の又三郎	36
或る農学生の日誌	9	紫紺染について	1	風野又三郎	48
茨海小学校	4	若い木霊	2	北守將軍と三人兄弟の医者	6
烏の北斗七星	1	十力の金剛石	4	狼森と笹森、盗森	3
黄いろのトマト	9	雪渡り	4	虔十公園林	6
化物丁場	5	双子の星	6		

次にこれらの用例を、1 比喩と2 強調に分類し、さらに後に呼応する語との関係でさらに分類を試みた。

1 比喩

a まるで～ようだ(やうだ)

- ・枝はまるで弾丸のやうにまつすぐに飛んで行つて、たしかに子供の目の前に落ちました。(水仙月の四月)
- ・二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり、(注文の多い料理店)

- ・土神は今度はまるでべらべらした桃いろの火でからだ中燃されてゐるようにおもひました。(土神ときつね)

b まるで～みたい

- ・それから頭を一つふって椅子へかけるとまるで虎みたいな勢でひるの譜を弾きはじめました。(セロ弾きのゴーシュ)
- ・てぐす飼いの男は、まるで鬼みたいな顔つきになつて、じぶんも一生けん命糸をとりましたし、(グスコーブドリの伝記)

c まるで～ふうに

- ・雪はまるで寒水石という風にギラギラ光ってゐた(なめとこ山の熊)
- ・タネリは、まるで、早く行ってその青ぞらを少し喰べるのだといふふうに走りました。(タネリはたしかにいちにち噛んでいたようだった)
- ・あらゆる光でちりばめられた十字架が、まるで一本の木というふうに川の中から立ってかがやき、(銀河鉄道の夜)

d まるで～ぐらい

- ・ことに肩をそびやかして、まるでうで木もがりがり鳴るくらゐにして通りました。(月夜のでんしんばしら)
- ・黄色なくちばしを大きくあけて、まるでホモイのお耳もつんぼになる位鳴くのです。(貝の火)
- ・ブドリの主人の苗は大きくなつてまるで黒いくらゐなのに、となりの沼ばたけはぼんやりしたうすい緑いろでした(グスコーブドリの伝記)

e まるで～ばかり

- ・花はまるでとびたつばかりかがやいて叫びました。(十力の金剛石)
- ・その役人の顔はまっ赤でまるで湯気が出るばかり殊に鼻からはぷつぷつ油汗が出ていましたので何だか急にこはくなくなりました。(二人の役人)
- ・若い木霊は胸がまるで裂けるばかりに高く鳴り出しましたのでびっくりして誰かに聞かれまいかとあたりを見まはしました。(若い木霊)

f まるで～そうだ(さうだ)

- ・チュンセ童子は背中がまがってまるで潰れさうになりながら云ひました。(双子の星)
- ・赤いダアリヤはまるで泣きさうになりました。(まなづるとダアリヤ)
- ・玉はお日さまの光を受けて、まるで天上に昇って行きさうに美しく燃えました。(貝の火)

g まるで～

- ・まるで蛹の踊りです。(チュウリップの幻術)
- ・まるで暴風だね、(猫の事務所)
- ・そばでよく見るとまるで小さな蛾の形の青じろいあかりの集りだよ。(ポラーノの広場)

h まるで～ほど

- ・ジョバンニはまるでたまらないほどいらいらしながら、それでも堅く、唇を噛んでこらえて窓の外を見ていました。(銀河鉄道の夜)

2 強調

a 否定あり

- ・雪がまったくひどくなって来た方も行く方もまるで見えず二人のからだもまっ白になりました。(ひかりの素足)

- ・二疋はまるで声も出ず居すくまつてしまひました。(やまなし)
- ・足は、まるでよぼよぼで、一間とも歩けません。(よだかの星)

b 否定なし

- ・路がどう曲ってどう上ってるやら、まるで夢中で自分の家までやってまゐりました。(とっこべとら子)
- ・紺三郎なんかまるで立派な燕尾服を着て水仙の花を胸につけて(雪渡り)
- ・汽車の中がまるでざわざわしました。(銀河鉄道の夜)

4 「まるで」という語全体における分類ごとの比率

では、これらの用例が、どれほどの比率で使用されているのかということを百分率でとらえなおしてみると以下のようなになる。

比喩(371 例)								強調(205 例)	
1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	1 f	1 g	1 h	2 a	2 b
76.0%	1.07%	1.34%	6.19%	1.61%	1.88%	10.7%	0.26%	14.1%	85.9%
285 例	4 例	5 例	23 例	6 例	7 例	40 例	1 例	29 例	176 例

このことから、宮沢賢治の比喩における「まるで」の使用は、バリエーションは多いが、ほとんどが一般的な「まるで～ようだ(やうだ)」(1 a)という表現になっていることがわかる。また、強調の用法については否定語の呼応を伴わないで、程度のはなはだしいことを述べる用法(2 b)が多いことがわかる。辞書でも否定の語を伴うことが記されているが、賢治は辞書にない程度副詞として多用しており、これが賢治の独特な文体を作り出していると言えそうである。

5 各作品における分類ごとの比率

ところで、こうした「まるで」の用法は、作品によって偏りが無いのだろうか。それを調べるため、今度は作品ごとに分類項目とその用例数を調査した。

	比喩								強調	
	1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	1 f	1 g	1 h	2 a	2 b
イーハトーボ農学校の春	3									2
いちょうの実	1						1			2
インドラの網							1			1
馬の頭巾				1						1
おきなぐさ	5									2
オツベルと象	1									
カイロ団長	1									
かしはばやしの夜	6									2
ガドルフの百合	3						1			2
グスコブドリの伝記	7	1		1					4	7
クンねずみ	1									1
さいかち淵	5									2

サガレンと八月	3						1		1	1
さるのこしかけ	1									
三人兄弟の医者と北守将軍	3						1		1	2
鹿踊りの始まり	1									
シグナルとシグナレス	5						1		1	5
水仙月の四月	3						2			
税務署長の冒険	9								2	2
セロ弾きのゴーシュ	5	1		1			2		2	2
台川	1									
谷	1									3
種山ヶ原							1			
タネリはたしかにいちにち噛んでいたやうだった	2		2							1
注文の多い料理店	1									
チュウリップの幻術							1			
月夜のけだもの	2						1			
月夜のでんしんばしら	4			2						3
土神ときつね	5			1						
手紙四	2									
電車	1									
毒蛾	4			1						2
とっこべとら子	1									1
どんぐりと山猫	3									3
なめとこ山の熊	9		2			1				4
二十六夜	3									1
猫の事務所	1						1			1
林の底										1
ひかりの素足	13						2		1	7
ビジテリアン大祭	3				1		3			7
ひのきとひなげし	4								1	1
フランドン農学校の豚	3					1	1			3
ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記	12						1			2
ポラーノの広場	8			1			2			6
マグノリアの木									1	1
まなづるとダアリヤ						1			1	
マリヴロンと少女	2									
みじかい木ぺん	2									2
めくらぶどうと虹	3									
やまなし	1								1	

よく利く葉とえらい葉	1									
よだかの星	7						1		1	2
或る農学生の日誌	3	2		1					2	1
茨海小学校										4
烏の北斗七星	1									
黄いろのトマト	2						1			6
化物丁場	3									2
貝の火	5			1		2	3			1
蛙のゴム靴	2									1
革トランク										1
学者アラムハラドの見た着物	3									2
雁の童子	2									1
気のいい火山弾										1
銀河鉄道の夜	21		1	2			3	1		12
耕耘部の時計	2									
山男の四月				1						
四又の百合	3									
紫紺染について										1
若い木霊	1				1					
十力の金剛石	1			1	2					
雪渡り	1						2			1
双子の星	3					2				1
蜘蛛となめくじと狸	2			1					1	
鳥をとるやなぎ	2			1						2
鳥箱先生とフウねずみ	1									
洞熊学校を卒業した三人	2			1			1			
檜ノ木大学士の野宿	5									10
二人の役人	4				1					2
氷と後光	2									1
氷河鼠の毛皮	3			2						1
葡萄水	1									1
風の又三郎	17			1					3	15
風野又三郎	25			2	1		3		4	12
北守将軍と三人兄弟の医者	1						1		1	3
狼森と策森、盗森	2									1
虔十公園林	4								1	1

比喩の用法として呼応する語によって8つのパターンに分類したのであるが、当然長文になればなるほど語彙数も多くなり、比喩の呼応パターンも増えるのは当然のことではある。しかし、いろいろ

なパターンを用いて文に変化をつけようとした工夫も読み取れるのではないだろうか。3パターン以上の表現が用いられている作品は以下の通りである。

3 パターン 「グスコーブドリの伝記」「ビジテリアン大祭」「フランドン農学校の豚」「ポラーノの広場」「或る農学生の日誌」「十力の金剛石」「洞熊学校を卒業した三人」

4 パターン 「セロ弾きのゴーシュ」「貝の火」「風野又三郎」

5 パターン 「銀河鉄道の夜」

6 「まるで」の比喩のパターンについて

比喩には「まるで～ようだ」(1 a), 「まるで～みたい」(1 b), 「まるで～ふうに」(1 c), 「まるで～ぐらい」(1 d), 「まるで～ばかり」(1 e), 「まるで～そうだ(さうだ)」(1 f), 「まるで～省略」(1 g), 「まるで～ほど」(1 h)という呼応の語によるパターンが見られることはこれまでに述べてきたことであるが、今度はその比喩の内容について注目し、「まるで」が導く比喩が「ジョバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。(銀河鉄道の夜)」という用例のように名詞での比喩(形状イメージ)によるものか、それとも「馬はまるでおどろいたようにどてへ沿って一目散に南のほうへ走ってしまいました。(風の又三郎)」という用例のように動詞での比喩(動作イメージ)によるものかを比較することとする。

	品詞	総数	1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	1 f	1 g	1 h
比喩が単語	名詞	218	176	4		9	1		28	
	動詞	124	83		5	14	5	7	9	1

「まるで～ようだ」(1 a)は、名詞、動詞のどちらも表すことが可能である。

「まるで～みたい」(1 b)は、本来どちらも可能であるはずだが、賢治は名詞を受ける用法でしか用いていない。

「まるで～ふうに」(1 c)は、「ふう」という語が動作を表す語であるため、受けることができるのは動詞でしかない。

「まるで～ぐらい」(1 d)は、名詞、動詞のどちらも表すことが可能であり、賢治もどちらも用いている。

「まるで～ばかり」(1 e)は、本来用言を受けるものであるが、1例だけ名詞を受けている。

「まるで～そうだ」(1 f)は、用言を受けることが多く、ここでも動詞を受ける用例ばかりである。

「まるで～省略」(1 g)は、省略されている語が「ようだ」であれば、名詞、動詞のどちらも表すことが可能であり、賢治も(1 a)と同じように用いている。

「まるで～ほど」(1 h)は、本来どちらも可能であるはずだが、賢治は動詞を受ける用法でしか用いていない。

比喩は表すものが長くなればなるほどイメージがぼんやりとしてしまうため、できるだけ短く端的にイメージを与える語であることが要求される。(1 a)の名詞が多く用いられているのもそのためであると推測できる。

7 同時代の童話作家の使用実態

ここまで宮沢賢治という一人の人物を中心に「まるで」の用法をいろいろな角度から見てきたが、これは個人の問題なのであろうか、それともそういう用法を他の童話作家たちも同じように使用して

いたのだろうかということが疑問として挙げられる。

そこで、大正期の童話雑誌を代表する『赤い鳥』に登場する童話作家たちの使用例を抜き出してみることとした。なお、『赤い鳥』の調査対象は第1期第1巻の6冊(大正7年7月号～12月号)とした。

その結果は以下の通りである。

- ① 銀色の蜘蛛の糸が、**まるで**人目にかかるのを恐れるやうに一すぢ細く光りながら(芥川龍之介「蜘蛛の糸」 七月号 10頁)
- ② 自分ののぼった後をつけて、**まるで**蟻の行列のやうに、やはり上へ上へと一心に(芥川龍之介「蜘蛛の糸」 七月号 11頁)
- ③ 王子は、もうぐうぐうと鼾をかいて、**全て**石のやうに眠り込んでしまひました。(鈴木三重吉「ぶくぶく長々火の目小僧」 八月号 28頁)
- ④ ふさふさした金の髪は、それこそ**丸で**金の絲の瀧のやうに、きらきらと肩から足の下まで垂れ下がりました。(鈴木三重吉「魔法の魚」 十月号 18頁)
- ⑤ それでは**丸で**お話がちがひます。(鈴木三重吉「魔法の魚」 十月号 20頁)
- ⑥ **丸で**人をぺてんにかけたのと同じです。(鈴木三重吉「魔法の魚」 十月号 20頁)
- ⑦ 王様と役人とは、鴻の鳥が、**全て**人間がいふ通りに、こましやくれたことをいふものですから、二人ともをかしくてをかしくて堪りませんでした。(鈴木三重吉「またぼあ」 十一月号 15頁)
- ⑧ わしは**まるで**別なものだ。(松居松葉「子供の極楽」 十一月号 56頁)
- ⑨ 光りに馴れたものの目には、**全て**穴の中のやうに眞つ暗に見えました。(鈴木三重吉「またぼあ」 十二月号 6頁)
- ⑩ お中が透いてみると見えて、**まるで**虫が這ふやうに、シボリトボリと村の眞ン中の方へ歩いて行くのでした。(島村蓼三「村の寶」 十二月号 21頁)
- ⑪ お前**まるで**黒ン坊だぜ。(三宅周太郎「鳥の巢」 十二月号 29頁)

作家によって漢字表記もばらばらであるが、「まるで」という語は(1 a)の用法で用いられたものが「①②③④⑨⑩」、(1 g)の用法で用いられたもの「⑪」、(2 a)の用法で用いられたものが「⑤⑧」、(2 b)の用法で用いられたものが「⑥⑦」であり、他の童話作家も用いていることがわかる。ただ賢治は(1 b)～(1 h)までのパターンも使っており、そのバリエーションは他の童話作家の比ではない。

8 『分類語彙表』による類語との関係

3.1130-04 異同・類似 ちょうど さながら あたかも いかにも さも 見るからに

3.1921-03 限度 全く 全然 てんで てんから まるきり まるつきり

国立国語研究所が出している『分類語彙表』では、「まるで」という語は比喩として「3.1130-04 異同・類似」に、強調として「3.1921-03 限度」として分類されている⁶⁾。ここに表れたいわゆる類義語を賢治は使用していないわけではない。

- ・そして**ちょうど**星が砕けて散るときのように、からだがばらばらになって一本ずつの銀毛はまっしろに光り、羽虫のように北の方へ飛んで行きました。(おきなぐさ)
- ・ひらひらひかる三角旗や、ほこが**さながら**林のやうだ。(北守将軍と三人兄弟の医者)
- ・おまけに**いかにも**小学校の二年生に教えるように云うもんですからとうとうみんなどっと吹き出しました。私共の席から一人がすぐ出て行きました。(ビジテリアン大祭)
- ・ツェねずみが出て来て、**さも**大儀らしく言いました。(ツェねずみ)

ここに挙げた「異同・類似」の例に限らず、「限度」でも類擬語の使用は確認できる。

ではなぜ、賢治はあえて「まるで」という表現を選んだのだろうか。このことを考えるためには「まるで」と同じように、辞書ではどのように表記されているのかを調べる必要がある。各社の辞書の記述を調べるべきではあるが、まずは『大辞林 第4版』の記述を抜き出してみる。

ちょうど（副）

- ① 余分や不足なくぴったりと一致しているさま。ぴったり。きっちり。「一体に合う」「定員一だ」「八時一に終了」
- ② ある期待・予想にぴったりとあうさま。「その帽子は服に一似合っている」
- ③ ある時期にぴったりと合うさま。
 - ㊦ まさにその時。「一バスが来た」
 - ㊧ たった今。「兄は一出かけたところです」「一行こうとしたところだ」
- ④（多く下に「ようだ」などを伴って）そのものの形状・性質などが、別のあるものによく似ているさま。まるで。あたかも。「月は一鏡のように見えた」〔「丁度」は当て字〕

さながら（副）

- ① 二つの事物・状態が似ているさまにいう。
 - ㊦（下に「...のような」「...のごとく」などを伴って）他になぞらえる意で表す。ちょうど。まるで。「草原は一海のようにだった」
 - ㊧（名詞の下に付いて）本物によく似ているさま。...そのまま。...そっくり。「本番一に行く」
- ② まったく。ひたすら。「沖の鷗の一白きは／ふところ日記 眉山」
- ③ そのまま。そのままの状態で。「たえて、ことづてもなし。一六月になりぬ／蜻蛉 中」
- ④ そっくり全部。のこらず。「大事を思ひ立たん人は去りがたく心にかからん事の本意をとげずして、一捨つべきなり／徒然 59」

あたかも（副）〔「あだかも」とも〕

- ①（多く下に「のようだ」「のごとし」などを伴って）形状・様態・性質などを、よく似ている物事にたとえて形容する語。ちょうど。まるで。「一戦場のような光景」「一勝者のごとく振る舞う」
- ② ちょうどその時。まさに。「時一一月一日」「一柱時計は徐（しず）かに八時を点（う）ち初めた／社会百面相 魯庵」

いかにも【〈如何〉にも】（副）

- ①（多く「そうだ」「らしい」などを伴って）その人や物の感じがよく示されているさま。どう考えても。非常に。「一痛そうだ」「一高くて手が出ない」
- ② 常識や予想の通りであるさま。また、相手の言葉に答えて、肯定・同意を表す感動詞のようにも使われる。まことに。おっしゃるとおり。「一学者らしい話し振り」「一、そのとおりに」
- ③（状態・理由などが）どんな風でも。どうしても。「あしくもあれ、一あれ、便あらばやらむ／土左」
- ④（下に打ち消しの表現を伴って）どのようにしてみても。どうしても。「東国北国のいくさ一しづまらず／平家 7」
- ⑤ 願望を表す。ぜひとも。「今は、一 一かけて言はざらなむ／源氏 宿木」

さも【然△も】（副）〔副詞「然（さ）」に助詞「も」が付いた語〕

- ① 本当にそれらしいさま。いかにも。「一うれしそうに笑う」「一知っているかのように話す」
- ② そのように。そのとおりに。「一あらん」「女思ひも寄らねば、一心も得で有るに／今昔 29」

こうしてみると、「ようだ」「ごとし」という語と呼応して用いられる語と「そうだ」「らしい」という語と呼応して用いられるものがあることがわかる。

「まるで」についてはこれまで見てきたように多くの語と呼応しており、特定の語と呼応するというわけではない。さらには呼応する語を省略する(1 g)のような用法も持っている。つまりは同じ比喩を表すにしても「まるで」は他の比喩を表す語に比べて守備範囲がきわめて広いということが言えるのであり、一番オーソドックスな表現であると言えよう。さらには「さながら」「あたかも」「いかにも」「さも」は文語的な硬い感じがあり、童話には不向きであるということも要因の一つであろう。

まとめ

「まるで」という語を中心に賢治の表現の特色を見てきた。「まるで」は比喩にも強調にも使われる語であるが、賢治の場合、比喩としての使用は 371 例で 64.4%，強調としての使用は 205 例で 35.6% と、強調で使うのが 1/3 強と多く用いられていることが分かった。小松は「方言」としての用法もあるのではないかと述べたが、それにしても 1/3 の使用は頻度が高いと思われる。

現代における「まるで」が比喩を表すときの代表的な表現のように受け取られている今、否定を伴わない強調としての「まるで」の用法は、やはり賢治の独特な世界を醸し出すのに一役買っていると言っても過言ではない。

付記 本論考は 2020 年 1 月 30 日に行われた第 5 回武庫川女子大学宮沢賢治研究会における発表資料に加筆、修正を加えたものである。その席上、田中毎実先生、遠藤純先生から貴重なご意見、ご指摘を賜った。記してお礼申し上げます。

注

- (1) 李津安「副詞「いかにも」「さも」「まるで」「まさに」について」『言葉と文化』7 名古屋大学 2006 pp.85-102
- (2) 朴秀娟「完全否定を表す副詞「まるで」「ぜんぜん」「まったく」に関する一考察」『神戸大学留学生センター紀要』22 神戸大学 2016 pp.41-57
- (3) 朴秀娟「副詞「まるで」が共起する述語についての一考察（非比況の用法を中心に）」『日本語の研究』第 7 巻 2 号 日本語学会 2011 pp.94-95
- (4) 小松聡子「賢治童話の表現研究（副詞「まるで」を手掛かりとして）」『国際児童文学館紀要』11 財団法人大阪国際児童文学館 1996 pp.71-87
- (5) 『分類語彙表』独立行政法人国立国語研究所 増補改訂版 2004